〔特集：香港の過去と現在〕

『東亜同文書院大旅行誌』の食の記述にみる近代日本青年のアジア観

――香港の例――

The Asian Look of Modern Japanese Youth Who Sees in Description of Food in the Toa Dobun Shoin, or Great Journey Journal: A Hong Kong Example

須 川 妙 子

SUGAWA Taeko

愛知大学短期大学部

Aichi University Junior College

E-mail: *sugawa@vega.aichi-u.ac.jp*

Abstract

The sentiments of students on a journey have been written in the Toa Dobun Shoin, or Great Journey Journal, a detailed record of extensive exploratory travel in East Asia same script note graduate student. It is possible to read out sentiments about sites and nostalgia about the mother country from overseas, as well as other things, from the description of food in particular. Because we went every place in Asia that had been under Japanese colonial rule, the students noticed that I felt different sentiments about Chinese inland areas and enjoyed the life and culture that my heart was attracted by in “colony Asia.” Hong Kong, which was under the British government is mainly examined in this report.

The students regard Hong Kong as “the foundation of Britain’s Oriental rule”, and impressed that the town was completed by the British system. The life culture they enjoyed in Hong Kong was the British culture that the British brought to Hong Kong. It is the same as the example in Taiwan, and it was caught in a place where you enjoy “culture of rulers” without seeing Chinese culture. In Taiwan, I found “the Japanese culture of Taiwan” “Western culture seen by Asians”, I kept my physical and mental stability by feeling Japanese culture, but in Hong Kong I almost never asked “Japan”. Hong Kong was a place where you can enjoy western culture.

Ⅰ．はじめに

東亜同文書院[1)]生の大調査旅行[2)]の記録である『東亜同文書院大旅行誌』には、行程中の書院生の心情が縷々記述され、特に食に関する記述からは、現地に対する心情や外地における母国への郷愁等を読みとることが出来る[3)]。植民地支配下にあったアジア各地においては中国内陸部とは異なる心情をもっていたことに着目し、書院生が「植民地アジア」の中で心惹かれた生活文化について探る。本報告では英国統治にあった香港を例とし、近代日本青年のアジア観を探る。

Ⅱ．史料および方法

『東亜同文書院大旅行誌』（雄松堂出版オンデマンド）を史料とし、香港を経由した行程[4)]が含まれる記録を分析対象とした。食に関する記述を抽出して、前後の行程や現地での待遇、当時の世情などと照らし合わせて東亜同文書院生の心情を導きだした。

さらに、2017年 3 月 3 ～ 6 日の香港での現地調査で得た見聞、資料を合わせて検討材料とした。

Ⅲ．書院生の食文化背景[5)]

書院生が大旅行を遂行するのは成人直後の時期であり、書院入学までの日本での生活が彼らの生活文化背景、食に対する概念を形成したと考える。書院生が如何なる生活文化背景をもって大旅行を遂行したのか、本分析の対象とした書院生のおおよその誕生期から入

1）1901年に東亜同文会（近衛篤麿会長）が上海で設立した高等教育機関。「教育文化事業によって日中友好事業を成し遂げるという理念に基づく人材育成を目的とする」とされた。詳細は愛知大学ホームページを参照されたい。

2）最終学年の卒業年次生が数名からなる班（10～20班）をつくり、中国大陸を中心とした幅広い地域で数か月間の現地調査を行なった。藤田佳久氏の研究により、1907年から1943年までの35年間、少なくとも662コースが確認されている。「調査報告書」と「調査日誌」が義務付けられており、「調査日誌」を「大旅行誌」と称している。

3）分析の詳細は、加納寛編 2017年（あるむ）『書院生、アジアを行く――東亜同文書院生が見た20世紀前半のアジア』収録の第 7 章「『大旅行誌』の食記述にみる書院生の心情変化―「雲南ルート」選択の意義を探る―」pp. 137–149を参照されたい。

4）中国内陸部に加えて東南アジアを経由したルートの選択は加納寛編2017年（あるむ）『書院生、アジアを行く――東亜同文書院生が見た20世紀前半のアジア』収録の第 9 章「書院生、東南アジアを行く!! ――東亜同文書院生の見た在留日本人」pp. 167–183による加納寛氏の分析に従った。

5）下川・家庭総合研究会編 2000年を参考に検討した結果である。抽出した各年代の食関係事項の詳細は、須川 2014年に表掲載しているので参照されたい。

学までの期間にあたる1890年から1920年頃の日本の食文化の特徴は以下の４つの点である。詳細は拙稿（須川 2014、2017）を参照されたい。

１．米の安定供給による食糧事情の安定
２．衛生面を含めた食の質への関心の高まり
３．嗜好品摂取の日常化
４．食堂、駅弁の普及による食事の簡便化

すなわち、当時の日本では食糧事情は安定しており、衛生的な環境での食事が可能であった。外出先での食事調達の懸念もなく行動ができて、嗜好品摂取や外食という食を楽しむ習慣もできていた。

Ⅳ．香港入港時の印象と食行動

香港に対する書院生の認識は、入港時の第一声の記述が如実に語っている。「港から眺めた香港市街は、全く支那気分をおびてゐない。」（24期生・1928年）「『外国の街』ほんこん――。」（26期生・1930年）香港は「外国」なのである。書院生のいう「外国」とは母国・日本ではなく、学びの場である中国・上海でもなく、また、調査地・中国内陸部でもないところ、すなわち「西洋の国」なのである。大旅行誌等の書院生が残した史料における記述では日本、上海へ向かう場合は「帰る」と記し、中国内陸部での調査へは「向かう」、西洋諸国の統治下にあった地域へは「行く」との表現が散見されることから、書院生にとっては、各国に対する位置づけの違いがあったものとみる。

その「外国」へ到着した書院生は第一印象として「全くお伽話の國へ来た様な柔かい感じがする。」（26期生・1930年）と記し、未知の世界へ踏み入れた心持を語っている。その高揚感は「香港！　何と云ふ美しい文学的名称だらう。ホンコン！」（30期生・1934年）「英国の華やかな極東政策の基礎が踊る。」（30期生・1934年）という統治国である英国の文化への強い憧憬の念を語っている。香港入港は書院生にとって、調査地である中国の一地域への到着という大旅行の一部分ではなく、調査地としての認識とは切り離した「外国旅行」[6)]の始まりであったとみることができる。

香港における食体験でも憧れの英国文化を満喫したことが次のように縷々記されている。「小奇麗な喫茶店の硝子張のテーブルで、チョコレートクリームの小豆色の味を舌の上に惜しむようにして」（24期生・1928年）「アイスクリーム、アイスクリーム。一つがたった二十仙！」（25期生・1929年）「パンと紅茶、パイナップルの生をはじめて食べる。あまり食べると熱を出すそうだ。うまい。」（25期生・1929年）「ふわりと焼いた子供の拳

６）香港ルートが観光的であったことは塩山 2014年に詳しい。また、本稿Ⅴでも分析する。

程の大きさのパン、有平糖のやうに巻き上がったバタ、筋の通った柔らかい肉」（27期生・1931年）。

香港を離れ、いよいよ中国内陸部へと向かう時、「全部の荷物を置いて支那式籠子一個。パン、バナナ、ジャム、明日の夕方までの生命の糧」（30期生・1934年）という現地調達した最小限の食料を携えて出立し、「籠を提げた老婆がくる。籠の中には何か食物があるに違ひない。」（24期生・1928年）と、行程中には食料入手に常時目を光らせていた様子が記されている。

2017年 3 月の現地調査において、書院生が英国の食文化を体験した西洋喫茶、西洋食堂等が立ち並ぶ地域から食料調達をした中国文化の色濃い市場へと歩を進めると、その食文化、生活文化の差異に驚愕するものを少なからず感じた。書院生が現地人（中国人）を「怖い」と記しているのは、物腰柔らかな英国文化に触れたのちに活気あふれる現地の文化に圧倒されたゆえであろうことが想像された。

Ⅴ．香港での生活行動

香港での書院生の行動は、いかにも「英国での旅行体験」であった。「英国人に交じってホンコンクラブの軒下で」（25期生・1929年）「バーのジャズバンド、軽快なピアノの曲が始まる。」（23期生・1927年）のである。大旅行の目的である調査には「香港名物自動車旅行」（23期生・1927年）で出かけ、調査地には「見るべきものは、植物園、最高法院、チヤアター道路の繁栄」（23期生・1927年）を選んでいる。そして「英国人の自然への挑戦」（26期生・1930年）「かくまで文化設備を施している英国の努力の跡」（24期生・1928年）と絶賛し、「大英帝国の如何なる偉大なるかを賞嘆」（23期生・1927年）するのである。書院生の香港調査、生活においては「中国としての香港」への視点はほぼ皆無である。

このような書院生の香港での行動を支えたのは、現地在住の日本人達[7)]である。日本人旅館に宿泊し、同文書院卒業生や日本領事館等の日本人に頼って香港の英国文化を満喫していたのである。

Ⅵ．書院生のみた香港

27期生（1931年）の香港に関する総括としての手記には次のようにある。

・香港の地位が発展の素地を為したこと

7）塩山 2014年に詳しい。

・英国の国民性は能く勤勉にして支那人民と共同に事業の発展を図りたること
・英国人が植民地統治の才幹に富んで居る事
・同地の知識を修正する事を要求した。それと共にこの地の将来を予想する多大の便宜を与えてくれた

書院生の香港での見聞は、統治者としての英国の姿であった。「支那人民と共同に事業の発展を図りたること」とあるように、東亜同文書院の目指した「日中友好事業のための人材育成」[8]の成功例を、英国の香港統治にみたといえるのではないか。中国の現在を調査する大旅行でありながら、香港においてはその姿から日本と中国の「将来の関係を予想する」ことも可能にしたのである。書院生たちは香港において、自身が将来担うべき責務を意識し、発展していく（統治地域を含めた）日本の姿を想像することができたのではないだろうか。

一方で、30期生（1934年）はこうも書き記している。「英国の華やかな極東政策の基礎が踊る。その人工美の中に東洋人としての反抗を覚えさせられる」と。英国の華やかさに憧憬を抱きながらも、中国・香港の東洋的要素が西洋的なものに作りかえられていくことへの、東洋人としての反発である。26期生（1930年）が「英国人の自然への挑戦」と称賛した文化的要素は、視点を変えれば「人工美」であり、東洋人としての美意識との違和感も禁じ得ていないのである。

Ⅶ. まとめ―台湾と香港にみるアジア観の比較―

ここで、台湾の例（須川 2017）と比較したい。

大旅行において書院生がみた中国は、中国内陸部、台湾、香港で大きく異なるものであった。中国内陸部に関してはまさに中国人が長い歴史の中で連綿と作り上げてきた中国の姿であった[9]。大旅行の主調査地はこの中国内陸部において中国との友好事業のために未踏の内陸部を調査することであり、大旅行はその予備知識（アジア観）を携えて遂行されたはずである。しかし、内陸部を離れて東南アジアまで足を延ばすルートを組むようになると、その中継地として台湾、香港に立ち寄るようになる。台湾、香港は中国の一部ではあるが、他国の統治下に置かれ、内陸部とは異なる文化変革を為しつつある地であった。そこに立ち寄る目的は何だったのか。台湾にはアジアの中の「日本」をみていた。それも、近代以降に急速に発展した「西洋化した日本」、和洋折衷化した独自の西洋文化をつくりあげた日本の姿であった。香港においては、英国が自国の文化要素をそのまま持ち

8）注 1）参照。
9）藤田佳久氏の多くの研究による。その一部を参考文献に列記している。

込んでアジアに定着させた姿であった。「アジアの中の西洋」である。

書院生は大旅行中の台湾、香港において、アジアと西洋の関係におけるそれぞれの文化的要素のあり方、折り合いのつけ方の事例を体験してきた。書院生たちは、アジアをアジアとしてのみならず、中国―日本―西洋の三者間の関係性を知り得る地、さらにはその将来の関係性を予測させる地とみていたのである。

本研究は科研費（基盤研究 (C)15K01896）における共同研究であり、本稿はその一部の報告である。

参考文献

岩田晋典　2014年　「大旅行調査と台湾：その位置づけをめぐって」『同文書院記念報』Vol. 23別冊①　pp. 57–61
――――　2015年 a.　「東亜同文書院大旅行調査と植民地台湾：書院生が経験した『日本』」『文明21』No. 34　pp. 61–76
――――　2015年 b.　「東亜同文書院大旅行調査における台湾訪問ルート」『文明21』No. 35　pp. 87–97
片倉佳史　2009年　『台湾に生きている「日本」』祥伝社
――――　2015年　『古写真が語る台湾日本統治時代の50年1895–1945』祥伝社
栗原純・鍾淑敏（監修・解説）　2014年　『台湾の旅／台湾旅行の栞／趣味の台湾』近代台湾都市案内集成第11巻　ゆまに書房
加納寛編　2017年　『書院生、アジアを行く――東亜同文書院生が見た20世紀前半のアジア』あるむ
塩山正純　2014年　「『大旅行誌』の思い出に記された香港」『同文書院記念報』Vol. 23別冊①　pp. 49–56
下川耿史・家庭総合研究会（編）　2000年　『明治・大正家庭史年表』　河出書房新社
昭和女子大学食物学研究室（編）　1971年　『近代日本食物史』近代文化研究所
須川妙子　2014年　「『大旅行誌』の食に関する記載にみる書院生の心情」『同文書院記念報』Vol. 23別冊①　pp. 63–77
――――　2017年　「『東亜同文書院大旅行誌』の食の記述にみる近代日本青年のアジア観―台湾の例―」『文明21』No. 38　pp. 49–55
大学史編集委員会（編）　1982年　『東亜同文書院大学史―創立八十周年記念誌―』社団法人滬友会
高木秀和　2008年　「書院生は上海で肴を食べていたか―各期回想録にみる書院生の食事情―」『愛知大学東亜同文書院大学記念センター・ニュースレター』vol. 4
――――　2009年　「魚を食べていた東亜同文書院40期台生の食事情―倉田俊介氏より頂いたお手紙を中心に―」『愛知大学東亜同文書院大学記念センター・ニュースレター』vol. 5
東亜同文書院（編）　2006年『東亜同文書院大旅行誌』シリーズ（雄松堂オンデマンド）
中林広一　2012年　『中国日常食史の研究』汲古書院
西澤治彦　2005年　「食事文化史からみた中国の南北」『武蔵大学人文学会雑誌』第36巻 4 号　pp. 95–119
藤田佳久（編）　1994年　『中国との出会い』東亜同文書院・中国調査旅行記録　第一巻　大明堂
――――　1998年　『中国を越えて』東亜同文書院・中国調査旅行記録　第三巻　大明堂
――――　2002年　『中国を記録する』東亜同文書院・中国調査旅行記録　第四巻　大明堂
――――　2011年　『東亜同文書院生が記録した近代中国の歴史像』ナカニシヤ出版
季増民　2008年　『中国地理概論』ナカニシヤ出版
楊環靜　2009年　『走進台彎光陰的故事：誉村菜市場』太雅生活館出版社